

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 高大一貫の漢文教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 正一, Watanabe, Shoichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000230">https://doi.org/10.57529/00000230</a>

〔実践報告〕

## 高大一貫の漢文教育

はじめに

「読書」の醍醐味は「人間」を読むおもしろさである。必死に生きた人物達を命懸けで描いた作品には、登場人物とともに「作者という人間」が奥深くに封じ込められている。本を読む根本にあるのは、今ある自分について真剣に苦悩している人間が文字の向こう側にいる同じ人間と出会うことである。人が人に出会う運命ともいえる一瞬は「人生意気に感ず」という境に本気で生きる人間を導く。先達が繰り返し「素読」し「手習

渡辺正一

い」を重ねてきたのは、文字の習得や作品の保存・研究のためばかりでなく、それが今を生きる自分を確かな存在として実感する最善の読書法であるからではないか。よく耳にする読書の意義は、「人は人なり、我は我なり」を痛感するところにあると思えてならない。「漢文」の読書で目の前の若き命が、掛け替えのない自分に見合った多くの「人間」に出会い「自己理解」を深めてほしいと願っている。学力の根本となる「教科書」は、「語句・文法的学習」「地理・歴史的把握」「人物・思想的理解」という三本柱で構成された、「読書を学ぶ(教える)名文集」である。高校時代から本格化する「漢文」という名文

学習と、大学の専門分野である「漢文学」研究とを貫き通す「読書」について考察してみたい。

### 一 高校教育の現状と大学入学生の現実

#### 〈本章の概略〉

1 「週五日制」「ゆとり教育」「新課程」で高校「古典」の授業激減（おそらく「週六日制・旧課程」の3割〜5割減）

▼平成四年九月〜月1回土曜休み

↓平成七年四月〜月2回土曜休み

↓平成十四年四月〜完全週5日制

（小中学校は平成十三年四月〜）

▼平成十五年四月〜「ゆとり教育」本格的開始

（小中学校は平成十四年四月〜）

▼平成十一年「学習指導要領」告示

↓平成十五年度の一年生から学年進行で実施

2 特に高校教育現場での「教科書」就中「漢文」軽視

（大学入試での出題率の低さ）

3 「句形」暗記こそ「漢文」学習とする受験勉強の現実

（「音読」学習不足・「人物理解」無視）

4 その「句形」学習すらその場凌ぎという現実

（「返り点・送りがな」も理解できない高校生の存在）

5 「国文法」・「漢文」未履修の大学入学生の存在

6 「漢和辞典」の引き方を知らない大学入学生の現実

#### 〈高校教育の現状〉

「文部科学省が「詰め込み」教育を否定し、片や「ゆとり」教育を推進し、「週五日制」（学校教育法施行規則（省令）を導入した結果、日本中の子供たちが低学力、学力劣化に悩み、猫も杓子も塾通い、狂気の沙汰としか言いようがない状況を招来してしまった。」（『憂う！わが国の文教政策』）という吹野安先生の憤慨が、まさに高校教育の現状である。

「週五日制」の完全実施に先立って、当時の勤務校がその「実験」高校となり、私はその担当学年の担任となった。文科省の現場責任者である管理職からの職務命令は一つ、「成績を落とさず進学実績を上げよ」である。まともな教育現場では授業時数と生徒の学力が比例する。高校での授業日数・時間を減らすということは、学力向上のためにどこかでその授業時間を補わなければならないということだ。世間一般では「猫も杓子も塾通い、狂気の沙汰」（前出）となつて当たり前の「情況」

である。

しかし、その時の勤務校は生徒・保護者からの信頼が厚く、塾・予備校に行ったことのない生徒、所謂「未塾児」が数多くいた。また、旧制中学校から続く「文武両道」の伝統を守り、運動部を中心に九割以上の生徒が何らかの部活に属していた。「週5日制」というのは、楽をしたい教員とサボりたい生徒には好都合であっても、まともな教育現場にあつては「今まで6日で行ってきた授業を5日で熟して土曜・日曜は部活動」という生活を強いる制度なのである。当然、現場の教員・生徒は「文」と「武」の板挟みに陥った。

「文」では授業時間確保のため「0時間目」と呼ばれる早朝課外が国語・英語・数学に組み込まれ、6時間目の終了後には「補習」が行われた。つまり、月曜から金曜まで実質一日8コマの授業実施で、土曜日授業の4コマ分を補うどころか、逆に授業数を増やしたのである。この変則的な授業を三年間日常とした卒業生は、過去最高の進学実績を残した。

そして、「武」である。結果をいえば、実績を残した三年生も含め入部率九割以上は変わらず、野球部初の関東大会出場が象徴するように、部活動は相変わらず活発であった。しかし、これは県内屈指の伝統校の生徒だからこそ成し遂げられた結果

なのであつて、どの学校のどの生徒でもできることではない。

さらに、教員である。「文武板挟み」になった時、学年主任はこう言った。「私は生徒がかわいい」。教育現場を無視した一方的な文教政策などで生徒の可能性を潰してなるものか、という宣言である。吹野先生のおっしゃる「逸れ船に乗せられた」「子供たち」（前出）を何とかしようというこの学年主任の一言に、人の子を教える責任を思い起こし、良心を掻きざられたのは私一人ではなかった。

しかし今思えば、その時に受け持った生徒達の能力と矜恃、その時の教員の熱意と努力、これらが図らずも「お先棒を担ぐ」ことになってしまったのだ。月一回の「土曜休み」は月二回となり、そして平成十四年四月から「完全週5日制」、さらに平成十五年四月からは「ゆとり教育」が本格的に開始され、今に至るのである。

#### 〈大学入学生の現実〉

高校教育の現状は、そのまま、大学入学生の現実となる。

週6日が「週5日」に削減されたことで授業時数減となるのは、英語や数学ではなく、国語である。例として、普通高校の一年生でこれまで5単位だった「国語総合」が4単位となった

場合を取り上げてみよう。5単位つまり一週5コマであると、「現代文2コマ・古文2コマ・漢文1コマ」という授業配分になるため、毎週「漢文」の授業をすることが可能であった。それが週4コマになると、「現代文2コマ・古典2コマ」となるのが一般的だが、「古典」は「古文1コマ・漢文1コマ」という授業配分にはならない。「漢文」は大学入試での出題率が低いというのが主な理由である。私は新採用間もない頃、ベテラン教員から「それほど入試にもしなない漢文に授業時間を割いてどうする」と言われたことがある。まだ「旧課程」の時分でもこの有様であったのだから、「週5日制」「ゆとり教育」となってしまうえば「漢文」を高校で履修しない生徒がいてもおかしくない。「浪人して初めて予備校で漢文の授業を受けた」大学入学生生の存在は理の当然である。

中間・期末の定期テストに出題するために、一つの作品だけそれも2・3時間程で終わりにしてしまうのが「漢文」の授業、という高校も多い。この場合、定期テストを年間5回(中間2回・期末2回・学年末1回)として単純計算すると、三年間の授業で15作品(年5作品×3年間)しか扱わないことになる。「臥薪嘗胆」や「管鮑之交」を知らない大学入学生がいても不思議ではない。

月2回「土曜休み」となった平成七年度から平成九年度末までの三年間、私の「漢文」の授業時間数は合計103コマ(50分/1コマ)であった。(「漢文総合学習の試み」國學院中國學會報 第四十六輯)これはかなり恵まれた環境の中で自由に授業させていただいた学年での時間数である。おそらく現在では三年間で50〜60コマ程度であろう。この状況で大学入試突破となると、「句形」暗記こそ「漢文」学習の王道、とばかりに受験勉強が始まる。そして、「10日で完成」「一週間で成績アップ」とよくある受験参考書まがいの遣り口で手っ取り早く「わかりやすく」その場凌ぎを繰り返した結果、重要「句形」暗記どころか「返り点・送りがな」も理解できない生徒を大学に送り込むことになるのである。

「漢文訓読法」は五十の「かな」で五万の「漢字」に挑んだ先達の心意気と叡智の結晶である。「訓読文」は「自国語」かなを遣って「国文法」で「外国語」漢字・漢文」を読んだ「日本の古典」である。つまり「国文法」の知識なくして「漢文」読解はないということだ。ところが、「漢文」よりははまだ授業時間のとれる「古文」も厳しい状況である。「週五日」では「国文法」という授業を時間割に入れる「ゆとり」はない。「用言」「助動詞」「敬語法」「和歌の修辞法」といった重要事項

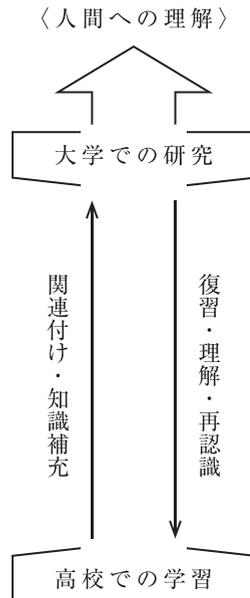
は、「文法書」で体系的に指導するのではなく、作品読解の中で出てくるたびそれらの断片をその都度暗記、というやり方ですませてしまうことになる。あるいは、週末課題にして提出させる・夏休みの課外で集中学習させるという方法をとらざるを得ない。さらに困ったことには「週5日制」となった後、「古語辞典」「漢和辞典」を授業で引かせる時間的「ゆとり」がなくなった。そして、辞書の引き方は大学入試には出題されない。電子辞書は使えても、紙媒体の「古語辞典」「漢和辞典」の引き方を知らない大学入学生がこうして生まれた。

「音読」に始まり「音読」に終わるのが「漢文」学習である。「人物理解」が「読書」である。真の学力養成には個々人に応じた「手間暇」がかかるものなのだ。「ゆとり教育」の破綻は、「週5日制」により教育現場から「音読」「読書」という「手間暇」＝「ゆとり」を奪った、当然の悲惨な結末である。

## 二 基礎学力養成の基本方針

### 《「高校」から「大学」へのスムーズな流れ》

#### 〈本章の概略〉



1 関連付け＝高校時代までの知識を時間軸・空間軸の中で結び付けて整理する。

2 知識補充＝読解に必要な基礎知識を関連付けて補充し基盤を整備する。

← 〈知識整理・基盤整備しつつ「読書」を重ねて〉

3 人間理解＝結び付けて整理し補充し整備した基礎知識を人間理解（自己理解）に役立てる。

#### 〈「高校」から「大学」へのスムーズな流れ〉

高校までの学習を土台として「漢文学」研究がある。その基

礎をなす「漢文」の教科書を中心教材は、『論語』・『孟子』・『史記』・『唐詩選』である。主にこれらの中から高校三年間で学んでおきたい(授業しておきたい)、大学での勉強・研究の基盤となる教材を、ジャンル別・人物中心にピックアップする。

(参考)『歴史と人物で学ぶ 漢文演習』渡邊焉馬)

**史伝** (時代順)

- 1 管仲と鮑叔「管鮑之交」(「春秋五霸」)
  - 2 晏嬰「節儉力行」
  - 3 呉王夫差と越王勾踐「臥薪嘗胆」
  - 4 蘇秦と張儀「合従連衡」(「戦国七雄」)
  - 5 藺相如と廉頗「刎頸之交」
  - 6 孟嘗君「鶏鳴狗盗」(「戦国四君」)
  - 7 項羽と劉邦「鴻門之会」・「四面楚歌」
- 思想** (学派別)
- 1 「儒家」|| 孔子・顔回・子貢・曾子・子路「聖人と弟子達」
  - 2 孟子と荀子|| 「性善説」と「性悪説」
  - 3 「法家」|| 韓非子「信賞必罰」
  - 4 「道家」|| 老子・莊子「無為自然」・「胡蝶之夢」
- 詩文** (時代順)

- 1 中華民衆の歌「詩経」
- 2 屈原「楚辞」
- 3 陶淵明「飲酒二十首(其の五)」
- 4 李白「早發白帝城」「送友人」「春夜宴桃李園序」
- 5 杜甫「絶句」「春望」「登高」
- 6 白居易「香炬峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁」
- 7 杜牧「江南春」「山行」
- 8 韓愈「雜説」(「古文復興運動」)
- 9 柳宗元「捕蛇者説」(「唐宋八大家」)

もちろん、これだけで充分などとはとてもいえず、教育現場の事情によって意見は多岐にわたる。しかし、私は自身の現場経験を踏まえ「高大一貫の漢文教育」の実情を考えると、右の約三十名の「人物理解」が適当なのではないかと思っている。

「読書」は「人物理解」である。高校でも大学でも同様である。「漢文」に登場する上記の三十名程の重要人物達が、どの時代・どんな場所で、いかに考えて生き抜いたのかを「読書」しておかなければ、大学での勉強・研究は「砂上の楼閣」に帰する。努力すればするほど・先へ進めば進むほど、何をしているのかわからなくなって、自分自身さえも見失うことになる。

しかし今、高校教育がその場凌ぎにならざるを得ない実態を見ると、高校で学んだ「漢文」の知識は、そのままでは、大学における「漢文学」研究の土台にならないだろう。高校から大学へのスムーズな流れはもはや存在しないといってよい。研究の土台をなす基本学習は、大学の現場に先送りされてしまっているのである。

#### 〈基礎学力養成の基本方針〉

大学入学生に対する「漢文」指導の根幹は、「関連付け」による知識整理と「知識補充」による基盤整備である。これが不十分な学力のまま大学に入学してしまった「漢文」学習者に対する、大学現場における「基礎学力養成の基本方針」であると考えている。

歴史的仮名遣いで「五十音図」が正しく書ける本学入学生は、40人中3〜4人である。これは平成二十六年から十八年度までの三年間〈中国古典読法基礎〉の最初の授業で「確認テスト（ひらがな・カタカナ）」した結果である。（「ピンイン」表記で用いる「アルファベット（ローマ字・26文字の大文字と小文字）」についても「確認」する予定）これは私が嘗て勤務した新設高校の一年生にも劣る数値である。誤解なきよ

うに断つておくが、私は本学入学生の学力の程度を嘆いているのではない。そうではなくて、受験勉強に墮し基礎からしっかりと指導されなかった（指導しようにもできなかった）現実を何とかしなければ、入学後の落ち零れや本学の存亡危機どころか、我が国の未来までも危殆に瀕するといいたいのである。

本学の学生諸君は実に素直である。きちんと指導すれば、生意気な理屈などこねず、着実に実行し実力を身につけていく。これが本学生の美点の一つである。教えられていないからできないのなら、しっかりと基礎を教えたい。国の文教政策に翻弄された「逸れ船」の若き水夫を「大船」に乗り換えさせ、真理の大海へと導けばいい。その「手間暇」こそ大学現場の、就中、「国の基を究むる」國學院の使命であると思う。

「関連付け」とは、高校時代までに学習した「断片的」知識を時間軸（年表）・空間軸（地図）・人間関係の中で結び付けて整理する学習方法である。大学入学生の中で結び付けて勉強してきたと思われる学生でも、「春秋時代」と「戦国時代」の区別が正確にはできない。つまり「孔子」と「孟子」の区別すらできない入学生がほとんどということである。この現実の中で進級し「研究」と称して専門分野に紛れ込んでしまったら、「新注」だ「古注」だと御託を並べたところで、まともな

読解などできる訳がない。

「関連付け」学習の具体例として「孔子」についての授業実践を紹介する。まずは大まかに、「孔子」は「春秋時代」の「魯」に生まれた「儒家」の祖で、「名」は「丘」・「字」は「仲尼」。高弟には「顔回」・「子貢」・「曾子」・「子路」など魅力的な人物がいる。さらに、同時代の人物で隣国の「斉」には「晏嬰」がいる——といった説明をする。そして、「辞書」や「テキスト」の巻末にある「年表」・「歴史地図」で確認させ、時代と場所・思想などを把握させる。

「知識補充」とは、高校時代までに学習しなかった（忘れてしまっている）読解に必要な基礎知識を、学習した（覚えていている）事項と関連付けて補充する基盤整備学習である。「孔子」に関連した具体例をあげれば、「孟子」と「荀子」、「荀子」と「韓非」「李斯」などである。「性善説」と「性悪説」、「礼」と「法」・「秦の天下統一」などを簡潔に説明する。以上を「関連付け」学習と同様に「年表」・「歴史地図」で確認させ、時代と場所・思想的関連・人間関係を把握させる。

「関連付け」と「知識補充」とは互いに補い合っており、研究に必要な不可欠な知識の土台を築く。すべての基盤は根底からの積み上げによって成り立っているものである。ところが現実

は、金儲けに奔走する受験産業が、学校の授業・勉強をサポートし、金儲けに奔走する受験産業が、学校の授業・勉強をサポートし、まわった無精者の怠惰と焦燥を逆手にとり、「試験に出る」「これだけで合格」と喧伝する。現実の「合格・落第」が目前になると、このコマーシャルに、まともに勉強を積み上げてきた生徒もつい乗せられてしまうことになる。高校現場の教員でさえ例外ではない。今の大学合格者はこの現実の「勝者」にすぎないといっても過言ではない。

以上のように「高校」から「大学」への流れを総合的に捉え、「関連付け」による知識整理と「知識補充」による基盤整備を基礎学力養成の基本方針としたい。そして、これらの基礎学習を繰り返しながら「読書」を重ね「人間理解」を目指したいと考えている。

### 三 大学入学生の指導実践例

#### 《基礎反復による積み上げ学習》

〈本章の概略〉

〈前期〉中国古典読法基礎 Ⅱ 語句・文法的学習が中心

☆「国文法」と「漢文訓読法」の基礎を関連付けた授業

1 「古典文法」 Ⅱ 「五十音図」、「用言の活用」、「助動詞の活用・接続・意味」

(テキスト『新しい古典文法』桐原書店)

2 「基本句形」 Ⅱ 「漢文」訓読法と「国文法」との関連付け

(テキスト『漢文必携』桐原書店)

3 「漢和辞典」 Ⅱ 「辞書」の引き方・付録の使い方

(『文学史』・『歴史地図』など)

\*各辞書の個性(『新字源』角川、『漢辞海』三省堂、『新漢語林』大修館など)

4 「文章読解」 Ⅱ 王安石「読孟嘗君伝」

(『中國文學概説』國學院中文編・『漢文必携』、「学習(白文)プリント」配付・音読・読解)

\*毎時間「国文法・訓読法の基礎」のプリント学習

〈配付↓学習内容「確認豆テスト」↓提出(出席確認)〉

〈前期〉中国古典読法Ⅰ

1 語句・文法的学習

◎ 「重要漢字(何・為・与・若・如)」の基本

「句形学習」(『漢文必携』例文の「学習プリント」)

◎ 「基本句形豆テスト(全12回)」(『読法Ⅱ』でも復習)

「音読」・「手習い」反復学習

\* 「国文法」の復習・確認(特に助動詞・学生によっては用言も)

2 歴史・地理的把握

「春秋・戦国時代」を「文学史」と「歴史地図」で把握

3 人物・思想的理解

「中国古典読法基礎」に関連する『史記』「孟嘗君列伝」

(『中國文學概説』、「白文プリント」配付・音読・読解)

← 〈前期〉から〈後期〉へのスムーズな流れ

〈後期〉中国古典読法Ⅱ

1 語句・文法的学習

「読法Ⅰ」で使用した「基本句形豆テスト(全12回)」を「音読」・「手習い」反復復習

2 歴史・地理的把握

「(先史) 秦の天下統一」現代(時間がなければ唐・宋代まで)を「文学史」と「歴史地図」で把握(「春秋・戦国時代」の復習も)

3 人物・思想的理解

「管仲と鮑叔」「孟子と荀子」「項羽と劉邦」「李白と杜甫」といった重要人物達の生きた時代と個性・思想を踏まえた理解(『史記』・『唐詩選』などからの「白文プリント」配付・音読・読解)

### 〈前期 中国古典読法基礎〉の授業

「中国古典読法基礎」は、「漢文」を初めて学ぶ学生にも理解可能なレベルから積み上げていく、「国文法」と「漢文訓読法」の基礎を関連付けた、「語句・文法的学習」中心の授業である。受講生は中国文学科一年生ばかりでなく、他学部・他学科の、それも一年生から四年生まで・さらに留学生と、多彩な顔ぶれが集まっている。受講目的も様々なのだが、「漢文」の読解方法を基礎から学びたい、あるいは「漢文」を読めるようになりたいという思いは共通である。「教科書」が読めるかどうかを試す「教員採用試験」に備えてという学生はいても、「漢文」が得意だという学生はいないといつていい。驚くのは、本学に入学しているにも拘わらず、高校で「国文法」や「漢文」の授業を受けたことのない学生が少なからずいる現実である。ましてや「世界史」・「地理」の未履修者数は調査するだにおぞましい。しかし、まずはともかく「国語」である。高校時代に

使用した「国文法書(古典文法書)」・「漢文学習書」での復習・(初めての)学習である。高校で履修しなかった受講生には「古典文法書」(『新しい古典文法』)と「漢文学習書」(『漢文必携』)を購入させ、高校一年生の基本から積み上げていく。指導概略は以下のとおりであるが、これは前任の長谷川清貴先生のアドバイスを本に、現場の学生の状況を踏まえた今のところの授業実践である。

第一に「国文法(古典文法)」では、「五十音図(ひらがな)(カタカナ)」の正しい書写から始める。次に「用言(動詞・形容詞・形容動詞)の活用」、さらに「助動詞(29語)の活用・接続・意味」を理解・暗記させる。

第二に「基本句形」では、まず「国文法」と「漢文訓読」の基礎を関連付けて理解させる。具体的には、「日本語」と「漢文」との違いを次の三点で示す。

①語順↓「返り点」の意味と使用方法

②活用↓「送りがな」の意味と使用方法

③品詞↓特に「助詞・助動詞」の接続と使用方法

次に、「国文法(Ⅱ中古文法)」と「訓読法」との相違点を板書する。例えば、

☆「国文法」 ☆「訓読法」



いる。各辞書の持つ特色の一部を例示する。

『新字源』付録「中国文化史年表」 〓 明解な「漢文」歴史

解説

『漢辞海』付録「漢文読解の基礎」 〓 簡潔な「漢文」構造

説明

『新漢語林』本編中「46コラム」 〓 重要な「漢文」事項

概説

\* 『新字源』付録「中国文化史年表」は「読法Ⅰ・

Ⅱ」でも使用(プリント配付)

第四が「文章読解」である。『説孟嘗君伝』(唐宋八大家文

読本)は、テキストの『中國文學概説』にも『漢文必携』にも採用されている。『史記』「孟嘗君列伝第十五」を読んだ王安石の九十字での名評論文である。授業内容を概説する。

1 「人物理解」中心の読解 〓 「時代背景」と「歴史地図」

戦国時代「孟嘗君」 〓 「戦国四君」・「戦国七雄」

→

前漢 「司馬遷」 〓 「史記」 「孟嘗君列伝第十五」

→

北宋 「王安石」 〓 「読孟嘗君伝」

2 文章構成の把握 〓 「対比構造」を読み取る

① 「題名」を読む

「孟嘗君」とはどんな「人物」か?

② 「本文」を読む

〈評論文〉読解のポイント

A 「具体例」で説明 ↓ 「鶏鳴」と「狗盗」

B 「対比」で強調 ↓ 前半「一般論」

⇔

後半「自説」

C 「言い換え」で反復↓後半「自説」を「詠嘆形」・

「限定形」・「反語形」・「否定形」で反復強調

3 内容理解と要約 〓 「重要漢字」と「基本句形」の働き

① 「キーワード」 「キーセンテンス」

「嗟乎、孟嘗君特鷄鳴狗盜之雄耳」

② 「要約」(20〜30字)

「孟嘗君は「士之雄」ではなく、「鷄鳴狗盜之雄」である。」

(孟嘗君は、英雄などではなく、ただの親分にすぎない。)

〈前期「中国古典読法Ⅰ」の授業〉

学力の根本となる「教科書」は、「語句・文法的学習」「地

理・歴史的把握」「人物・思想的理解」という三本柱で構成さ

れた、「読書を学ぶ(教える) 名文集」である。「名文」中には「名人」が生きている。小林秀雄は「人間から出て来て文章となったものを、再び元の人間に返す事」が「読書の技術」(「読書について」)だという。要するに、「読書」は文字という形に封じ込められている登場人物・作者を本来の人間の姿に戻すこととあり、「作者という人間」と「読者という人間」の「対話」がここから始まる、ということだ。

〈中国古典読法Ⅰ〉の授業は、文字面だけの学習にならないように工夫して構成された「教科書」の「三本柱」を核とする「音読・手習い」の反復学習である。

#### 〈語句・文法的学習〉

##### ① 「重要漢字」学習

「基本句形」を丸暗記して試験に合格しても、「漢文」が読解できたわけではない。その「漢字」がその時その場面でどんな意味を持っているのか、前後関係を把握して読み分けなければ読解したことにはならないのである。この「語・文」の前後関係・「文脈」の場面状況の読み取りは、「漢文」のみならず「古文」・「現代文」さらには「外国語」においても共通の読解法である。人間関係と同様に言葉の意味を決定するのは、その時そ

の場の前後関係・場面状況であるからだ。この方法は、言わば「普遍的読解法」である。「漢文学」研究の常である数多重的な「註疏」を参考としながら読み進む「特殊な読解法」とは対照的なものだ。大学入学生には、「漢文学」という特殊研究に踏み込む前に、一つの「漢字」の様々な読み取り方「普遍的読解法」を身につけてほしい。前後関係・場面状況を広く見渡す「観の眼」を持ってこそ、専門分野を細かく見分ける「察の眼」が鋭くなるばかりでなく、研究している自分自身の位置も客観的に把握できるようになるからだ。このことは次に述べる「地理・歴史的把握」・「人物・思想的理解」においても同様である。

五万字の中から「漢文必携」は「百十一語」を「重要漢字」としてまとめ、『漢文語彙字典』(尚文出版)では「約450字厳選」して「必修漢字」としている。平成二十一年度の高校二年生には自分の現場経験から「重要漢字」を「厳選」し、「必修百漢字豆テスト(十字ずつ十回)」を作成し授業開始時に実施した。

現在「中国古典読法Ⅰ」の授業では、「必修百字」から「最重要五漢字」Ⅱ「何」・「為」・「与」・「若」・「如」を選抜し、「プリント」学習させている。三枚の「学習プリント」(約60例

文)を使った「音読・手習い」による「反復学習」である。これにより、「百字×一文」百例文よりも多面的な(多場面・多状況に対応した)「五字×十二文」六十例文」の学習が可能となる。基礎学力構築には、三冊のテキストを一回ずつやるよりも、一冊のテキストを三回やる方が効果的なのと同じである。「学習プリント」の一部を例示する。

【疑問形】(『漢文必携』p44~51)

一 「何」を用いる句形

1 何 謂 浩 然 之 氣。(『孟子』「公孫丑上」)

何をか 浩然の氣と 謂ふ。

何を 「浩然の氣」と言うのか。

2 相 煎 何 太 急(曹植「七步詩」)

相煎ること 何ぞ 太だ 急なる

どうしてそんなに激しく煮立てるのか。

3 問 余 何 意 棲 碧 山(李白「山中問答」)

余に問ふ 何の 意ありてか 碧山に 棲むと

私に尋ねた、どんな考えがあつて緑の深い山中住んでいるのかと。

4 何 日 是 帰 年(杜甫「絶句」)

何れの 日か 是れ 帰年ならん

いつの日になったら故郷に帰れるだろうか。

受講生は、各例文の「出典」での場面説明を受けた後、指で白文を押さえながら範読を聴き「語順」を確認した後、「音読」し「返り点・送りがな」を付ける。地道な「音読・手習い」の反復により「日本語」を磨き上げてきた先達によって、遂に「外国語の漢文」は「我が国の古典」になったといつてよい。「音読・手習い」学習は「祖先の道」を「子孫の道」とした好例である。

② 「基本句形」学習

授業開始時の「豆テスト」は、同一例文での「返り点・送りがな」⇓「書き下し文」という基礎反復学習である。具体例を示す。

第一回テスト「返り点・送りがな」を付けよ。

1 百 聞 不 如 一 見。

(百聞は一見に如かず。)

← →

第二回テスト「書き下し文」にせよ。

1 百 聞 不 如 一 見。

同一例文を別角度から繰り返し返し読むことが基礎学力構築には効果的である。次に「基本句形豆テスト」〈全12回〉Ⅱ〈6ペア〉を示す。

- ① 「返り点・送りがな」学習
- ② 「書き下し文」学習
- ③ 「再読文字」(「返り点・送りがな」)
- ④ 「再読文字」(「書き下し文・口語訳」)
- ⑤ 「使役・受身」(「返り点・送りがな」)
- ⑥ 「使役・受身」(「書き下し文」)
- ⑦ 「否定・禁止」(「返り点・送りがな」)
- ⑧ 「否定・禁止」(「書き下し文」)
- ⑨ 「疑問・反語」(「返り点・送りがな」)
- ⑩ 「疑問・反語」(「書き下し文」)

⑪ 「仮定・比較・選択 その他」(「返り点・送りがな」)  
 ⑫ 「仮定・比較・選択 その他」(「書き下し文」)

以上の「豆テスト」は「中国古典読法Ⅱ」でも同一プリントで実施し、反復復習させ基礎知識として定着させる。

〈地理・歴史的把握〉

受講生は「中国文学科」入学生なのであるから、上古から現代までの大まかな「中国文学史」は知っておかなければならない。しかし、ほとんどの入学生が「春秋時代」と「戦国時代」とを正しく区別できていない現実・前期授業時間の制限などの問題がある。そこで〈読法Ⅰ〉では「春秋・戦国時代」に範囲を絞り、主要人物・重要事項を「関連付け」ながら「知識補充」し、五百五十年間の基本的な「地理・歴史的把握」を目指すこととした。

基礎学力構築で大切なのは、使用テキストをやたらに増やさないことである。信頼できるテキストでの反復訓練が学力の核を作る。

◎ 〈地理〉中心テキスト『漢文必携』資料編「中国歴史地図」

\*参考テキストは各「漢和辞典」付録「歴史地図」

◎〈歴史〉中心テキスト『新字源』付録「中国文化史年表」

\*参考テキストは『中國文學概説』第一部「概説文」

その他は、授業中の反応や質問に応じて、各学生が持っている辞書で調べさせたり資料を用意したりする。『新字源』付録「中国文化史年表」は「読む年表」の好テキストなので、〈読法Ⅰ〉〈読法Ⅱ〉ともに中心テキストとして使用している。

これらの「テキスト」を活用した指導の一例を挙げれば、主要人物「斉の桓公」について学ぶ時には、中心テキストを使って、「桓公」を「春秋」年表」で読み、「斉」を「春秋」地図」で確認し、「時」と「場所」とを「関連付け」る。さらに、その業績としての「春秋五霸」・「管鮑之交」という人間関係を学び「知識補充」する、ということである。大切なのは、「桓公」が〈いつ（時間軸）・どこで（空間軸）・何をした（業績・人間関係）人物〉なのかを「関連付け」「知識補充」し総合的に把握することだ。このことは次に述べる〈人物・思想的理解〉においても同様である。

〈人物・思想的理解〉

「読書」とは「人間理解」であるから、「三本柱」の中心は

〈人物・思想的理解〉ということになる。「人物（作者）（登場人物）」が「何を考え（思想）・何をしたか（行動）」を読み取るのが、〈人物・思想的理解〉である。しかし、〈語句・文法的学習〉も〈地理・歴史の把握〉も、「人間理解」の「語学」側からの「時間・空間」側からの、それぞれの読解方法と

いってよい。つまり、この「三本」はそれぞれ独立した読解方法であると同時に、「三位一体」となって「読書」を支える「大黒柱」でもあるのだ。「句形」暗記こそ「漢文」攻略法と謳う「受験参考書」が危うく脆いのは、「大黒柱」がないからである。因みに「良心」ある「参考書」にはこう書いてある。

- a 語学的理解（1語彙 2語法）
- b 精神的理解（1把握 2批評）

c 歴史的理解（1事項の整理 2表現との関連）

「この三系列」は「深く融合した理解のしかたである」

（東京教育大学教授小西甚一『古文研究法』洛陽社）

「ぜひ必要なのが、古文の教科書そのものである」

「何といっても、教室での勉強ぐらい力つくものはない」

（同著者『古文の読解』旺文社）

「教科書」を捨て「授業」を忘れて「学力」はない、ということである。現実を踏まえた文教政策で、高校教員がまともな

「授業」をして生徒が「教科書」中心に一所懸命「勉強」すれば、大学入学者には研究の土台となる「基礎学力」が身につく、ということである。

「三位一体」つまり「関連付け」「知識補充」し総合的把握を目指した〈読法Ⅰ〉の授業教材として、『史記』『孟嘗君列伝第十五』がある。もちろん王安石はこの作品を読んで「読孟嘗君伝」を書いたわけであるから、〈基礎〉の「文章読解」と「関連付け」「知識補充」させるに最もふさわしい教材である。〈前期〉中国古典読法基礎の授業参照「孟嘗君列伝第十五」は『中国文學概説』の採用部分を中心に授業し、列伝末の「太史公」人物評も取り上げ「人物理解」の参考とした。

#### 〈後期〉中国古典読法Ⅱの授業

「高校」から「大学」へのスムーズな流れと同様に、〈前期〉から〈後期〉への流れも大切である。本年度の〈読法Ⅰ〉は青木洋司先生と分担して受け持ったので、直接あるいは電話・メール等で指導内容や教材について打ち合わせした。さらに使用する「プリント」類についても交換し合ったので、〈読法Ⅰ〉の指導範囲の整理ができ〈読法Ⅱ〉の授業内容も定められた。〈読法Ⅱ〉は〈読法Ⅰ〉に引き続く、「語句・文法的学習」

「地理・歴史的把握」「人物・思想的理解」を核とする、「反復復習」・「音読・手習い」「反復学習」である。また、二年次以降の勉学・研究へのスムーズな流れにも配慮しなければならない授業である。

#### 〈語句・文法的学習〉

〈読法Ⅰ〉で実施した「基本句形豆テスト〈全12回〉」による「反復復習」である。同じく授業開始時に行い、「漢文必携」で解説↓自己採点↓提出（出席確認）、という方法で基本復習させる。

#### 〈地理・歴史的把握〉

〈読法Ⅰ〉は「春秋・戦国時代」に指導範囲を限ったが、〈読法Ⅱ〉では受講生が来年度「中国文学科」二年生になることを踏まえ、「先史時代↪現代」の大きな流れを（授業時間の許す限り）「地図」と「年表」で把握させたいと思う。また、基礎学力構築の観点から〈読法Ⅰ〉と同じテキストを使用する。〈前期〉中国古典読法Ⅰの授業（地理・歴史的把握）参照）〈読法Ⅱ〉では「先史時代↪現代」の大きな流れを把握させるため、A3（B4）判一枚のワークシートを配付し「中國王

「朝略年表」としてまとめさせている。しかし、授業を受けてもこの「ワークシート」が作成できない受講生がいる。こういった学生に共通するのは「板書事項しかノートしない」授業態度である。授業は「聴く」から力がつく。「授業を聴く」とは、目に見える板書事項だけでなく、耳で聴いた言葉もノートにまとめるといふことだ。「何といつても、教室での勉強ぐらい力のつくものはない」(前出)というのは、「授業を聴く」姿勢あつてのことである。この現実には「中国文学科」だけの問題ではなく、本学の未来・本学生の将来を見据えて対処せねばならない大きな課題であると思う。

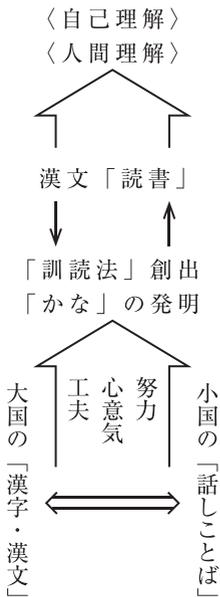
〈人物・思想的理解〉

まず「語句・文法」の復習が必要な状況であるが、〈読法Ⅱ〉では来年度以降にも配慮し、できる限り多くの「名文」を読ませたい。「臥薪嘗胆」や「管鮑之交」を知らない(授業を受けたことがない)受講生の現実を踏まえ、「管仲と鮑叔」・「孟子と荀子」・「項羽と劉邦」・「李白と杜甫」といった重要人物達をペアにして「読解プリント」を作成してみた。「漢文」は何と言つても対句の世界であるし、「対」にすることで「人物」の個性が際だつたからである。それらの「人物」を「時代順・ジャ

ンル別」に、彼らの生きた時代と個性・思想を踏まえた理解を目指して授業する。受講生は「基本句形」学習と同様に、指で白文を押さえながら範読を聴き、「語順」を確認した後、「音読」し「返り点」「送りがな」を付ける、という伝統的な「音読・手習い」学習を繰り返す。そして、目で見るだけ頭で考えるだけでなく、手探りで感覚器官を総動員して、文字の向こう側にいる「人間」との出会いを目指すのだ。結果として、この「読書」訓練が「基礎学力」を生み出し、専門分野の研究に入ったときの自分を支えることになるのである。

四 漢文「読書」の意義

〈漢文「読書」構造図〉



「読書」とは畢竟「自己理解」である。「読書人」とは「読書」し「人間理解」を生活の常とする知識人のことである。

「漢文」を読むとき先ず出会うのが、「五万の異国文字」に押し潰されそうになりながら、必死になって「訓読法」を編み出した幾多の知識人達である。彼らが我が国にもたらせた「かな文字」は、この小さな島国を形作ってきた偉大な発明である。今、「日本人」が「日本語」で生活しているのは「かな文字」が存在するからに他ならない。日本の言葉には、五十の「かな」で五万の「漢字」に挑んだ我が先達の努力と工夫、そして心意気が込められている。昔も今も「漢文」を読む意義の第一は、「訓読法」という先達の叡智に直接触れるところにある。この「叡智」で「漢文」を読み「知識」を身につけて来た「先達の足跡」が、今を生きる我々への「示唆に富んだ道標」となっている。

「漢字」は「ひらがな・カタカナ」発明の偉大な原材料であるとともに、今なお「日本語」に磨きをかけ続けている巨大な砥石である。本学の恩師である中島司有先生は「日本人の文化の特質は、ことば型」（『書のことば』）とおっしゃった。「文字型民族」の書く「漢字」は「話しことば」で生活してきた「ことば型民族」にとって異質な文化であった。この全く異なる厄

介な抵抗に我が先達は、「ひらがな・カタカナ」で「読書」という挑戦を繰り返した。その結果、「日本語」は語彙を増やしいよいよ洗練されて、『源氏物語』・『奥の細道』さらには『山月記』という「教科書」不動の「名文」が生まれたのである。「漢文」を読む意義の第二は、「読書」によって自らの「日本語」が磨かれるところにある。

私は「漢文」を「ひらがな・カタカナ」で読む。先達に倣い「訓読」する。一方、「漢字」の発音を「アルファベット（ローマ字）」で表記する「ピンイン」がある。もちろん、「共産党の政権樹立後に毛沢東がめざし」（『読む年表 中国の歴史』岡田英弘）・1958年公布の「漢語拼音方案」に基づいた「新しい表記法」も「中国文学」研究には必要だと思ふ。当然、「中国語」の発音学習は「ピンイン」で行う。確かに、「反切」や「韻書」に比べ「26個のローマ字」は「漢字」の発音表記に極めて便利である。しかし、「漢字」の他に「かな文字」を持つに至った「日本人」にとって、もともと「外国語」である「漢文」をこれもまた「外国語」の「ローマ字」で発音することが、まともな「読書」になるのか頗る疑問である。「漢文」音読という「読書法」と「中国語の発音練習」とを混同してはならない。「外国語」を「自国語」で読む創意工夫が「訓読」

であるのに対し、「自国語」漢字を「外国語」の借用で読むことになった。「ピンイン」なのである。

文字を持たなかった我が島嶼民は、大国の龐大な「漢字」と出会った時から「自国とは・自分とは何か」を常に考えねばならなかったはずだ。そして、試行錯誤を重ねた末の「漢字は漢字、日本語は日本語」という認識から創出されたのが「訓読法」ではなかったか。あの「訓点」を施された「訓読漢文」を読む度にそう思えてならない。先達は「漢文」を鑑としながら自国や自己を映し見てきた。更に書中の「人物」に出会う度に、とくに、一人として同じ「人間」はいないこと、その誰とも「自分」は違うことを痛感したに違いない。他者との邂逅が「自己理解」の始まりとなる。「人は人なり、我は我なり」の自覚に至ること、これが第三の漢文「読書」の意義であり、祖先の叡智への道である。

◆参考資料・文献

- 〈使用テキスト〉  
 ・『中國文學概説』(平22) 國學院大學中國文學科編  
 ・『漢文必携』(平25) 桐原書店  
 ・『新しい古典文法』(平25) 桐原書店

〈推薦辞書〉

- ・『新字源』(平25) 角川書店
- ・『漢辞海』(平24) 三省堂
- ・『新漢語林』(平22) 大修館
- 〈主な高校教科書〉
- ・『古典 漢文』(平2) 明治書院
- ・『論語・史記・唐代詩文抄』(平5) 東京書館
- ・『精選 古典II 漢文編』(平9) 明治書院
- ・『高等学校 古典(漢文編)』(平17) 桐原書店
- ・『改訂版 高等学校 古典(漢文編)』(平23) 桐原書店
- ・『高等学校 国語総合』(平15) 第一学習社
- ・『探求 国語総合(古典編)』(平16) 桐原書店
- ・『精選 国語総合(古典編)』(平18) 筑摩書房
- ・『新訂 国語総合 古典編』(平20) 第一学習社
- 〈その他の参考文献〉
- ・吹野 安『憂う！わが国の文教政策』(平26) 明徳出版
- ・中島司有『書のことろ』(昭60) 講談社
- ・岡田英弘『読む年表 中国の歴史』(平26) ワックKK
- ・小西甚一『古文研究法』(昭49) 洛陽社
- ・小西甚一『古文の読解』(昭49) 旺文社
- ・山岡萬謙『漢文語彙字典』(平6) 尚文出版
- ・『必携明説漢文』(平18) 尚文出版
- ・『高等学校の国語教科書は何を扱っているのか。』(平12) 京都書房
- ・『小林秀雄全集 第四卷』(昭53) 新潮社
- ・『唐宋八大家文読本 七』(平16) 明治書院
- ・『史記 九(列伝二)』(平16) 明治書院

- ・渡邊焉馬『歴史と人物で学ぶ漢文演習』（平13）河合出版
- ・『漢文総合学習の試み』（平12）國學院中國學會報第四十六輯
- ・『漢文読解の試み』（平25）國學院中國學會報第五十九輯
- ・『読解漢文レベル1〜4』（平23）桐原書店